

起きて身ごしらえのあと、コーヒーとパンで朝食をすます。仕事の日はそのま  
すぐ駅へ駆け込むのだが、今日は何となくテレビのスイッチを入れた。この一週間を  
まとめたニュースの番組らしかったが加代は見向きもせず、玄関の横にある北の  
部屋を開けに行く。

淡いブルーのカーテンを引きあげると、摺りガラスがむき出しになる。その裾の辺  
りは鈍い灰黄色にぼやけている。向かいのパソコン店が高々と揚げている看板が透  
けて見えるからだ。黄色の大きなパネルだから濁ったガラス越しでも、晴れた日に  
は陽を反射して明るくきらめくし、夕陽を浴びているときはことさら暖かい橙色に  
映る。今、目の前の色あいは雨降りよりのときのものだ。加代はまた気が滅入った。

“志度へ行くのはやっぱり延期しよう。今朝は何だか身体がだるいし…”

そう決めると急に気が軽くなる。窓の鍵をはずし、二重ロックもカチツと戻して  
顔の幅だけ窓を開けた。曇り空は起きたときと少しも変わっていない。

何となく目線を下ろし、加代はおやっ…と小首を傾げた。パソコン店の狭い駐  
車場に店主の車に並べてもう一台、濃紺の乗用車が停まっている。これまで一度だ  
って店主の車以外、目にしたことがなかった。

「あっ…」

加代は思わず声をもらった。広めのガラスドアは道路側へ向けて両開きにされ、  
店内には人の動きが見てとれる。中年の男性とその娘らしい子が手前の棚へ近づい  
てきて商品をみているようだ。応対の店主は奥手に立っているらしくここからは姿  
が見えない。

「やったあ！ お客さんだわっ…。本物のお客さん…」

加代は小声で呟きながらすぐに窓をぴしゃりと閉めた。のぞき見などしている幸運が逃げてしまいそうな気がする。

加代はかけっ放しのテレビの前に戻り忙しなげにチャンネルを切り替えたが、しまいには電源を切ってしまった。今、あの店にいる二人連れは目鼻立ちが似ているからきっと父娘だろう。

さい先がいい朝だ。"やっぱり、決めたとおり、今日行こう。雨も一晩じゅう降ったのだから、もうそろそろ晴れてくるかも..." 加代は壁に貼ってある時刻表を調べた。ここに引越してきて、七年目だが初めて乗る徳島行き、十分後に便があった。

急いでジャケットをはおりショルダーバッグを肩にして外に出た。踏み出したところでパソコン店の店先へ目をやると、さきほどの父娘がいた。仲良く一緒にダンボールの箱を車のトランクに積み込んでいる。女の子の笑顔がまぶしい。加代は思わず目を細め、小走りで駅へ急ぐ。

"あれはあの子の専用パソコンかな...この春、中学に入学するのかしら..."

父娘の車が発進すると店主は戸口から二、三步あゆみ出て腰を折った。車は加代を追い越していく。手持ち無沙汰になった店主の青年は視線を返し西の方角をうかがう。そちらから来る列車の微かな気配を察知したのだろうか。踏み切りを渡りながら加代はそれとなく店のほうを振り返った。背の高い青年がまだ立ち尽くしている。

車内は空いていたので、加代は窓際の席に腰掛けた。発車してすぐショルダーバッグを肩から外し膝にのせ、手に持った切符は上着のポケットにおし込む。一息つくとなんとか物足りない感じた。"何だろう...。あっ...お酒だ" 昨日は夕方、喘息

発作を起こした亮一のことと頭がいつぱいで、託児所の更衣室に酒を置いたまますっきり忘れていた。

手ぶらでなんか行けない。いかにも貧しげで…。加代は次の駅で降りようかと慌ててバッグを握りしめたが、志度に着いてから駅前で何か見繕って買ってでもいいかと座りなおす。そんな加代を尻目に列車は速度を上げた。

屋島駅を過ぎると五剣山が裾野辺りまで視界に入ってくる。車窓から見る山麓は昨夜の雨に洗われ清々しい。雲の切れ目から陽光が漏れてきて山の中央にそそり立つ峰に射している。天に向かって祈っているような岩峰が刻々と表情を変え温かみを増していくようだ。晴れあがるのはもうすぐだろう。

まもなく志度に到着というアナウンスが流れると加代は早めに席を立ち、足元をふらつかせながら降りロドアのほうへと寄って行く。そのとき南側の車窓が突然、華やいだようだ。

驚いて向けた眼にとびこんできたのは窓という窓のガラスいつぱいに溢れんばかりのピンク色だった。一瞬、薄紅い霞の中に列車が入りこんだような錯覚に捉われ、目をしばたたかせた。車体に触れそうな近さで過ぎ去っているものは満開の桜だった。駅の手前付近で、沿線に隣接して植わっている桜並木だ。

列車が駅の構内にさしかかると群れた薄紅色は最後尾の窓枠の中で漂いながら霞んでいった。過ぎ去った桜模様、どこかで見たことがある……。それがどこなのか何なのかすぐには思い出せないがとても懐かしい。絵は群がった桜ではなく乳白色に広がる雲か霞だったかもしれないなどと心もとなない感覚が頭をもたげている。

加代はあれこれと記憶の糸を手繰り寄せながらホームに降り立った。客たちの

背中が加代の目前で揺れている。それにつき従いながら、脳裏にふっと浮かんだものがある。“ああ……扇、舞扇の……華模様……”加代は立ち止まって心の中で呟く。それから急いで改札口へ向かう。

幼い頃、日本舞踊の師匠、千寿香が加代にくれた練習用の舞扇は実家に置いたままだ。父は加代が日本舞踊を習うことを許してくれなかった。バレエなら賛成だと言った。新しいものを好む性質だから日本舞踊では気に入らなかったのだろう。それに身を立てる術として習い事をさせようという考えもあったに違いない。子供の加代にはそんな父親を理解できるはずもなかった。

父はよく珍しい玩具を買ってくれ、その中には人形もあったが、工夫を凝らした仕掛けのものや綺麗だけれどどこか冷たい感じの青い目をした金髪ものばかりであった。妹の弘子はそれらを変可愛がっていたようだが、加代はどうしても馴染めず、優雅で穏やかな日本人形のほうが好きだった。

当時、足かけ四年も踊りを習ったがそれを証拠付ける品は何一つ手元にはない。もし、舞扇があのまま残っていれば……。嫁ぐとき家から持ち出せばよかったのに、若かったとはいえ我ながらなんとも情けない。それにあのあと、父母と断絶するよくなことになるうとは予想もしなかったのが口惜しい。

加代は駅前広場のところで国道を横切る信号を青で渡る。そのまま大通りを行き、初めての十字路で何となく立ち止まった。まっすぐ行けば少し先には志度湾が広がっている。潮の香りが微かにゆるゆると漂ってくるようだ。

加代は旧道のほうに折れた。昔はこの通りが町のメイン商店街で、実家はこの道沿いにある。加代は目の前に現れた町並みを自分の記憶と照らし合わせながら進

む。通りは新旧の建物が入り混じっている。まるで古い反物にあちらこちらと新しい布切れを充て込んだような風情だ。それに昔の賑やかさが嘘みたいに閑散としている。道幅が狭いので一方通行の標識がある。加代は自分の家が近づくとうつぶきかげんになって足を速めた。

家の少し手前で加代は思いきって顔をあげた。一瞬、胸に痛みが奔る。両隣にあった酒屋と洋品店はなくなり住宅に変わっていた。加代の家は二軒の新しい建物に挟まれて影が薄い。正面、高いところに揚がっていた店の看板がはずされ寂れている。

加代は家の前に立った。間口のガラス戸は全部締め切っており薄白いカーテンを張り巡らしてある。東隣との間にある路地は北の海岸通りへ抜けているが、下水溝を塞いだらしく軽自動車ぐらいいは通れる広さになり舗装されていた。そこへ回り込むと玄関だ。なぜか引き戸が開けっ放しになっている。加代は敷居の前で足を止めた。玄関へ一歩入るのか、それとも先に声をかけるのか…焦った。

「どちらさんですか」

どこからか緊張ぎみの声をした。聞き覚えがある。見回すと路地の奥、家の裏手あたりからだった。目をやると小柄な老女が建物の陰から顔だけのぞかせて不審そうに加代をうかがう。眉間に皺をよせて両の目をしょぼつかせて…、その細面から忘れもしない母の表情がにじみ出てきた。

「お母さん、私よ…」

加代は思わず声をあげた。身体は吸い寄せられるように駆けた。路地に出てきた母は少し屈んだ背中を反らすようにして薄くなった脛を見開いた。

「加代ちゃん…加代ちゃんかい…」

叫ぶような声だ。裏手にあつた民家は取り払われて広い駐車場になっていた。母は素早く振り返り、たて続けに甲高い声を出す。

「お父さん」

(以上平成24年1月9日放送分)